

バスル・スタイルの下着（腰当て）の製作 ——教材としての資料作成——

Production of Bustle Style Underwear (Lower Back Frame)
—— Making the Underwear as Teaching Material ——

大 信 田 静 子
Shizuko OSHIDA

I は じ め に

優雅なドレスを着用する機会は少ないが、女性として一度は着用してみたいのが華やかなドレス・スタイルである。本学服飾系では最後の作品課題にフォーマルドレスの製作を組入れている。シルエットの大きなドレスは下着の作成にかなりの時間を費やす。特に歴史的なドレスに関しての実物は身近で観察できるような資料館・美術館もなく、試行錯誤しながらの製作を繰り返している現状がある。歴史的なシルエットを参考にしたドレス類（ウェディングドレス、イブニングドレス）など多彩なシルエットを表現したデザイン画が学生から提出され、それらのドレスの形を整えるためには、アンダードレス（下着）が重要であり、しっかりした形を作らなければドレスのシルエットを保つ事は出来ない。しかし学生達の全てのシルエットを表現するための下着のサンプルを製作することは困難である。

前回（1998年）にパニエの資料として、チュール素材とクリノリン（枠型）を製作した。クリノリンスタイルが流行した後、1869年頃にバスル・スタイルが登場していることから、今回はバスル・スタイルに使用されている下着の作成を試みた。

本研究をするにあたり、実物の視察は困難であったが、神戸ファッション美術館を、会場としたセミナーに参加し見学する機会を得た。文献による写真資料や、絵画資料を基に、更に京都K C I（京都服飾文化財団）の資料をパソコンより出力する機会も得たことで大きく作用し、下着の製作を実施することが出来た。これを今後教材として活用することを目的に、縫製方法・材料などについて研究をした。

II 方 法

ドレスを支えている下着（腰当て）の実物資料の視察をおこなうため収蔵されている博物館、美術館など数ヶ所に問い合わせたが、下着を手にすることは不可能であるため文献による資料収集とした。しかし、コルセットや、クリノリンについての文献は多く出版されているが、バスル・スタイルの下着については詰め物との表記はあるが図版による文献は少なかった。今回神戸ファッション美術館で開催された、ロココ衣装展と共にバスルの実物を視察することが

できたことは幸いであった。しかし、展示物に関する解説や文献資料が少ないため、京都服飾文化財団での資料と SOEN EYE に掲載されている文献を参考に 2 種類の下着の製作を試みた。1870年代のバスルのアンダードレスは京都服飾文化財団で所蔵されているが実物を視察するのは不可能であったためパソコン上での資料を出力することができた。文献によると素材は木綿100%を使用、詰め物としての膨らみには、スティールボーンや、ワイヤーネット、ワイヤーコイル、ボーン・テープ、ホースヘアなど様々な物が使用されていた。しかし、教材としては身近に手に入る物として焼き入りリボン1.5cm幅を使用した。サイズはボディに着用していた資料を目安とし、中寸のボディを使用し製作を試みた。

III 考 察

1. バスルの変遷

バスル (bustle) とはスカートの後ろの部分膨らませるために用いる腰当て、杵のことを言う。17世紀末に現れたキュ・ド・パリ (cul de paris) パリのお尻の意¹⁾でフランス語でトゥルニユールともいう。日本では1880年代半ばに流行した鹿鳴館スタイルにあたる。その以前はオートクチュールの開祖といわれるチャールズ・フレデリック・ワースは1860年に華麗なクリノリン・スタイルを築いた。自由に伸縮できる物や、折りたためる物などであった。その後1869年には腰部が後ろの方につき出て、裾まわりの布をウエスト・ベルトに垂直につないだクリノリンとなり (図1)、後の「バスル・スタイル」の原型である。

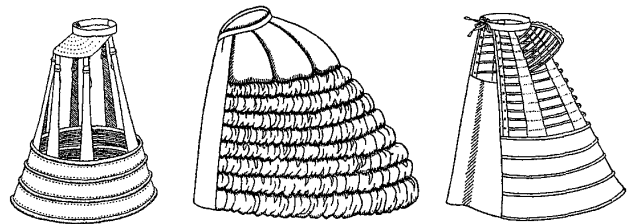


FIG. 72. (Left to right) SCARLET FLANNEL CRINOLINE, 1869; SANSFLECTUM CRINOLINE, 1863; CRINOLETTE, 1873

図1 クリノリン (1869, 1863, 1873年)
(THE HISTORY OF UNDERCLOTHES より抜粋)

1869年以降バスルは大きく 3 回登場している。^{2) 3)} 1869年頃は半分が鋼と馬の毛のフープや襷飾りで腰当てを作っていた。次の年にはスチールの半分の輪でメロンの大きさのものになった。スカートの内側に取り付けられたメロン大の半分のフープは、テープまたは紐で引っ張っていた。1870年から1875年頃までのドレスの下着はコルセットで胴を締め付け、胸は高く、スカートはペチコートやクリノッティを用い、後ろ腰から裾にかけて膨らませていた。ドレスは刺繍かレースの飾りがあり、膝の上まで達していた。前部と脇は突き合わせ、後部で結ばれたモスリンフリルは (図2) 固くのり付けされて

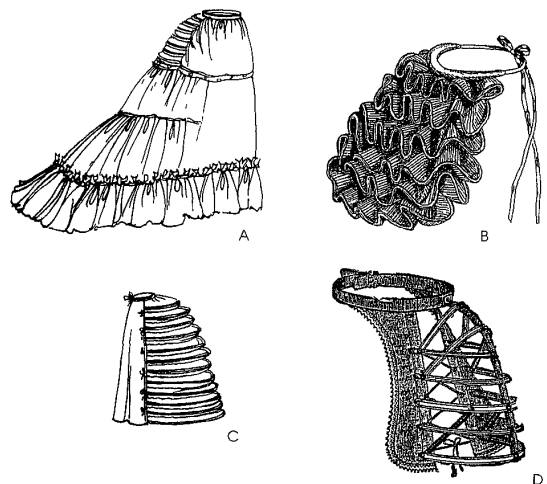


図2 バスル (西洋服装史より抜粋)
A 1872年頃
B 1875年頃 (モスリンをのり付け)
C 1877年頃
D 1877年頃 (最後のバスル)

いた。1876年から1882年頃には前面がストレートになり、スカートの幅が細くなり、別布の装飾されたスカートを腰に巻き付け、ひき裾になっていた。1883年から1890年ごろは後期バッスル時代で、このころはバッスルの形を保つために籐、竹、馬毛、鯨骨、鉄製針金、パフなど様々な材料

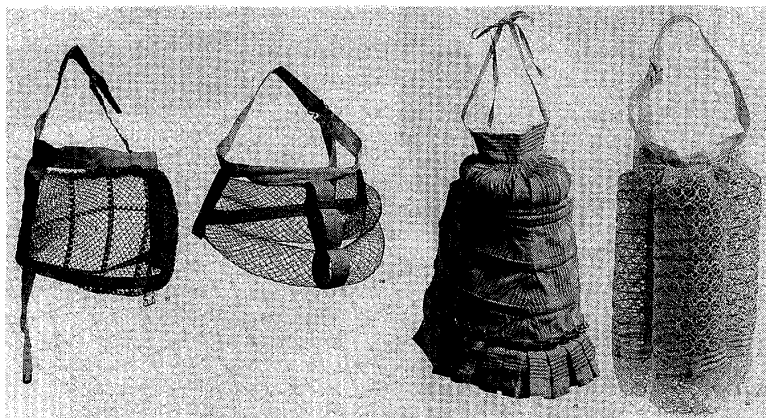


図3 バッスル 1880年以降
(身体の夢 ファッションOR見えないコルセットより抜粋)

や形であった。(図3) バッスル・スタイルの上衣は体にぴったりしてカラーはスタンドであった。袖は最初細く後半は羊脚袖であった。この後期バッスルは簡素な生地と単純な柄が好まれ、下に用いるペチコートの色と対比的な色であった。臀部は、高くたくし上げられ、豊富なドレープによって飾られ、更にヴォラン（フリル）や飾り紐で飾られていた。たくし上げたスカートの下に、もう一枚のスカートがあり長裾になっていた。⁴⁾ (図4-1, 図4-2) 1875年頃バッスルは姿を隠した。



図4-1 バッスル・スタイル JUNE 1875年
(FULL-COLOR VICTORIAN FASHIONSより抜粋)



図4-2 バッスル・スタイル MAY 1875年
(FULL-COLOR VICTORIAN FASHIONSより抜粋)

2. 製作方法

実物を観察できないため、まず参考文献を細かく観察することから始め、ファッション研究誌 SOEN-EYE No.28 下着の仕組みより、写真を細かく観察し、簡単な解説文から判断し製作をした物と、京都K C I（京都服飾文化財団）の資料から製作した物との二種類を作成した。写真は比較的内側が確認できる下着とし、製図がないため立体裁断で形を整えた。素材は木綿

地に金属杵の代用として（焼き入りリボン）を使用し腰を巻きスカートのように包み込む形のバスルとした。

（１）試作バスルA（ファッション研究誌 SOEN-EYE No.28下着の仕組みより）

試作バスルAは1870年頃のを製作した。（資料1）中寸法のボディを使用し（ウエスト62cm，ヒップ90cm，スカート丈55cm），立体裁断から製図を起こしている。バスルの部分は4分の1の後ろタイトスカートの製図を利用して立体で起こした製図をはめ込み作成している。膨らみの部分は金属杵（ボーン）を入れる位置で切り開きとした。^{5）} 文献の資料1の写真からボーンは水平に7本，たくし上げたスカートを支えるためか，ヒップの位置で斜めに1本が入っている。

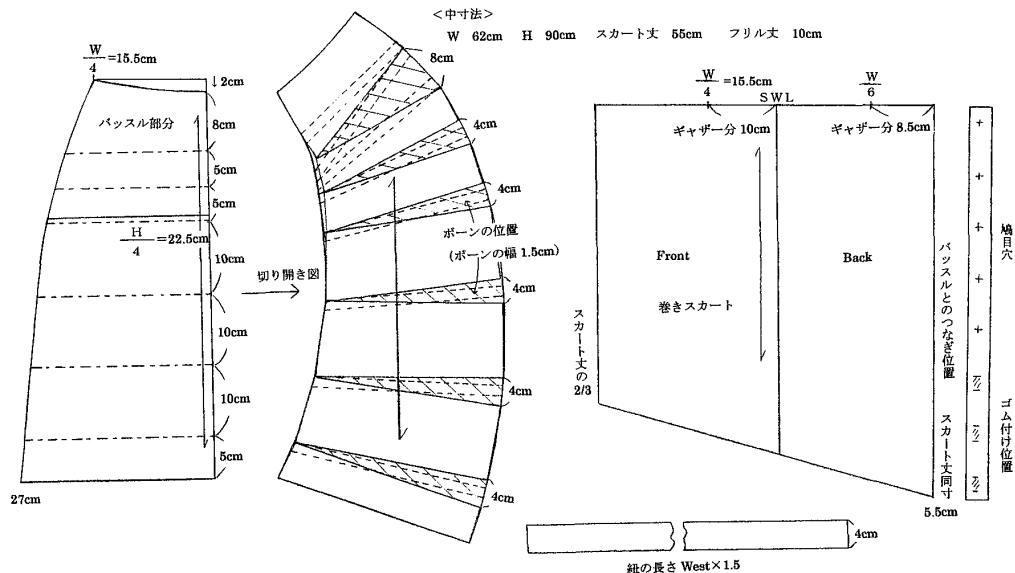
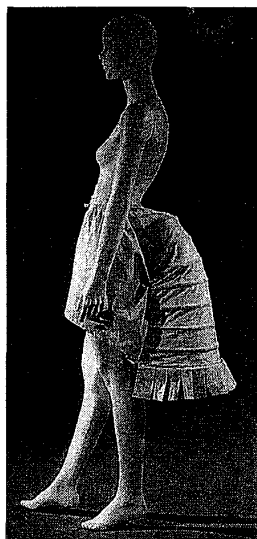


図5 バスルAの切り開きの製図

図6 試作バスルA巻きスカートの製図

切り開き位置をウエストから6cm離れた所で1本目とすると，後ろの紐がウエスト位置に付かず，浮いた状態となるため8cm離れた所で1本目の切り開きとした。2，3本目は5cm間隔とし，残りは10cm間隔としている。今回は資料を参考にバスルの丈とボーンの数を見て間隔を割り出している。バスル・スタイルのスカートの長さによりボーンの間隔の調整が必要と思われる。切り開きは各4cmずつとしたが，一番高いヒップの位置で1本目と2本目の間に，斜めに1本入っていることから，この箇所だけは8cmの切り開きとしている（図5）。巻きスカートはバスルの位置から付き，両サイドから前へ巻いている。バスルの部分に引っ張られることを考慮し，ウエスト寸法4分の1の8割と多めのギャザー分量とした。前スカートの丈は後ろスカート丈より3分の1短くした（図6）。ウエストは4分の1のサイズに3分の2のギャザー分を入れ巻きスカートを製作した。後ろスカートの裾にはボックスプリーツのフリルが施されている（資料1）。立体裁断で仕上げたスカートの裾に10本のボックスプリーツを



白の木綿地に金属枠の入った
バスル。中の紐を強く締め
ると腰の部分が膨らむ仕組み。
1870～80年代。

資料1 バスル1870年～1880年代
(ファッション研究誌 SOEN-EYE より抜粋)



内部。腰を巻きスカートの
ように包み込む形のバス
ルで、上部は鳩目穴に紐を
通して締め、下部はゴムで
金属枠を押さえつけて丸み
を出すようになっている。

資料2 バスル内部
(ファッション研究誌 SOEN-EYE より抜粋)

入れ、裨幅を3 cmとして仕上げている。内部はスカートのバスルと巻きスカートの間に枠の丸みを支えるための布が挟んである(資料2)。布は張りを持たせるために厚めの接着芯を施し、スカート丈の上部に鳩目穴を開け綿の紐を通して締め、枠の丸みの調節を可能にしている。下部はゴムで金属枠を押さえ丸みを出すようになっている(写真1)。

今回バスルの枠の素材として焼き入りリボン(焼入鋼帯)を使用した。1.5cm幅は厚みがあり、切断が困難な上、湾曲にするため切り口で生地を傷めるおそれがあることから、1 cm幅が適している。また、クリノリンと同様コンパクトに折りたたむことが可能で持ち運びや、収納がしやすいことがメリットである(写真2)。以上の製作過程を経て試作したものが写真3. 4. 5である。



写真1 試作バスルAの
内部

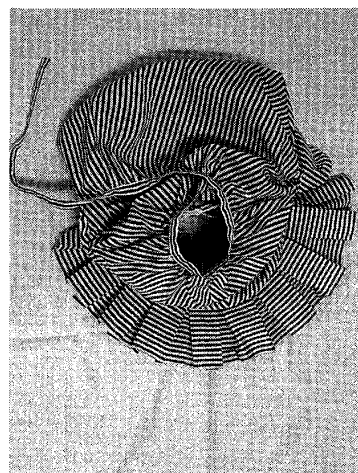


写真2 試作バスルA、折り
たたんだ状態

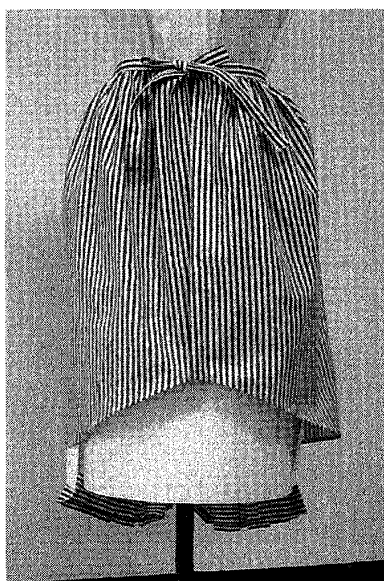


写真3 試作バスルAのFront



写真4 試作バスルAのSide

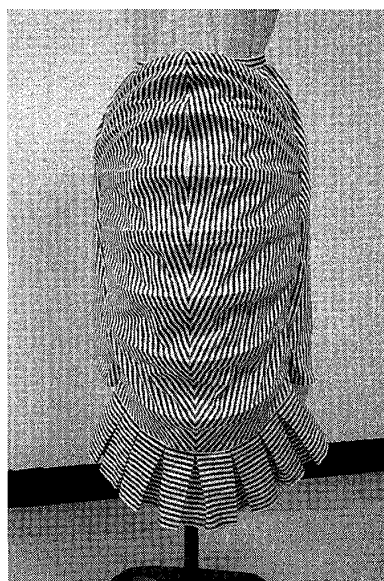


写真5 試作バスルAのBack

（2）試作バスルB（京都K C I（京都服飾文化財団）の資料より）

試作バスルBは1871年～1880年頃のものである。⁵⁾ 資料3と京都K C I（京都服飾文化財団）で出力した（資料4、5、6）を参考とした。同じく中寸法のボディを使用し、（ウエスト62cm、ヒップ90cm、スカート丈90cm）立体裁断で製図を作成した。資料5によるとヒップの部分は丸みを帯びているがその下は裾に向かって延長上にスカート丈となっているように思われる。

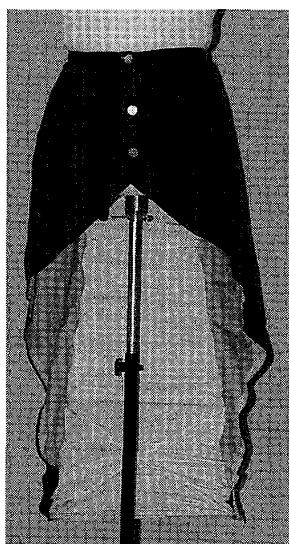
そこでヒップ位置とその前後で切り開きを入れ製作した（図7）。金属杵（ボーン）はウエスト位置からわりと狭い幅で5本のボーンが入り、その下からは少し広めの間隔で9本のボーンが入っていることが解る（資料6）。バスルの丈から割り出しボーンの入る間隔を次のように決めた。ボーンの位置は上5本を4cm間隔に、その下は9本を7cm間隔としている。ウエストには深めのタックが取られているため、試作バスルAでは難しかった6cm離れた位置に1本目を入れてみた。しかし試作バスルAよりはウエストに馴染むが少し浮いた状態となった。そのためタック幅5cm以上入れるか、ウエストから離れた位置を1本目とすることで解消できる。内側には焼き入りリボン（焼入鋼帯）を通す場所が必要であるため、スカートを二枚重ねで仕上げ通す位置にミシンをかけ通したが、厚みが出ると共に、重みもありボーンを通しづらいデメリットがあった。そのためスカートの裏側に幅広の綿テープを縫いボーンを通してしている。前中心はボタン仕上げとなっているため2



資料3 バスル
（ファッション研究史 SOEN-EYEより抜粋）



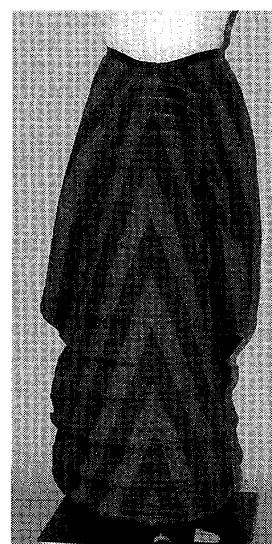
左 赤と茶の縞模様の木綿地に金属杵の入ったバスル。腰の部分にウエスト紐を結び、つり下げの形式になっている。1870～80年代。右上 使用しない時は写真のように小さく折りたたむための、収納に便利である。右下 部分。金属杵は丁寧にミシンでステッチされ、縞模様の柄を生かして後ろ中心で縫い合わされている。



資料4 Front



資料5 Side



資料6 Back

国名(不明) 年代(1871年~1880年) 素材(木綿 ストライププリント)
色(赤と黒のストライプ)

(京都KCIよりコピー資料)

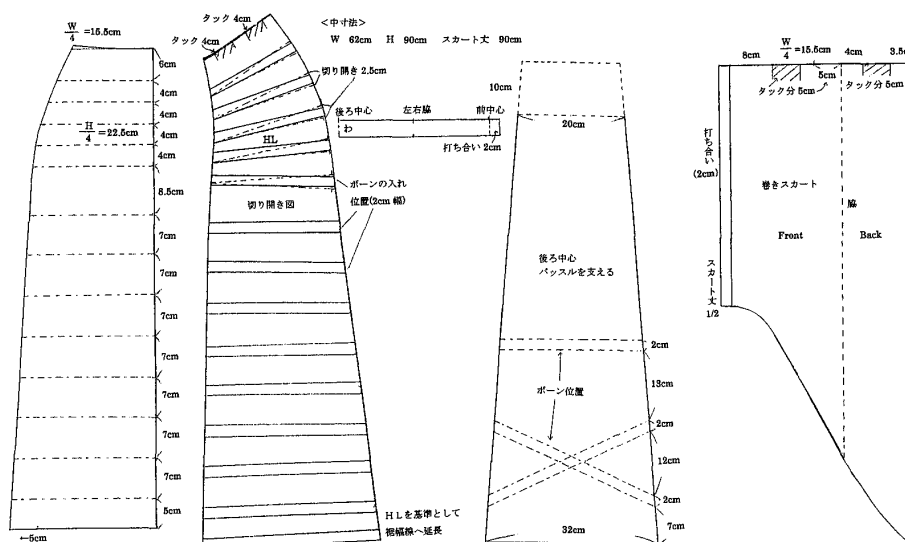


図7 試作バースルBの切り開きの製図 図8 巻きスカートと枠を支える布の製図

cmの打ち合いとし、前スカート丈はスカート丈の2分の1の長さとして製作している(図8)。内部は資料4を参考にボーンを支えるための布は、ボーンを湾曲に曲げながら裾幅を32cmとした。ボーンを支えるための布の長さは資料3を参考に、ウエストから10cm下がった位置で20cm幅の布を取り付けている。しかしボーンを支えきれなかった。(写真6) そのため綿テープ2本を布のない部分で渡すことで形が整った。丸みを支えるための内部の布はボーンの入っている位置まで必要であることが解る。試作バースルAは裾の内側に2本のボーンを交差させ入っているが、コンパクトにたため、持ち運びや収納も可能であった(写真7)。以上の製作過程を経て試作したものが写真8, 9, 10である。

ドレスのシルエットを整えるための参考として仕上げてきたが、実物を手にすることができず展示してある実物を周囲からの観察と、文献資料等を模索しながらの製作はかなりの困難で

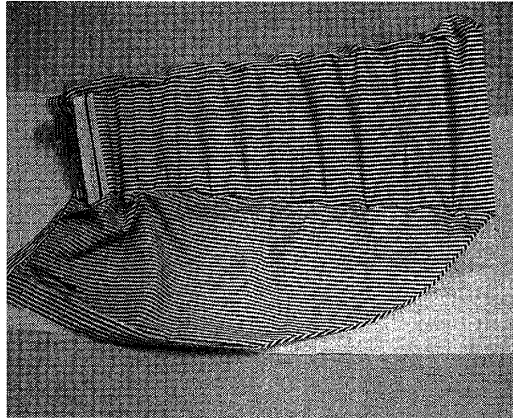


写真6 試作バスルBの内部

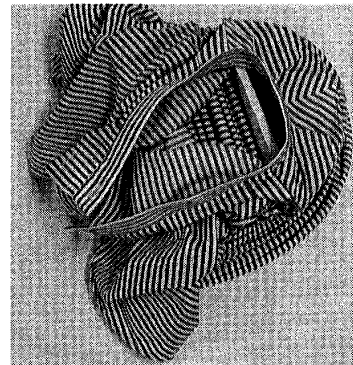
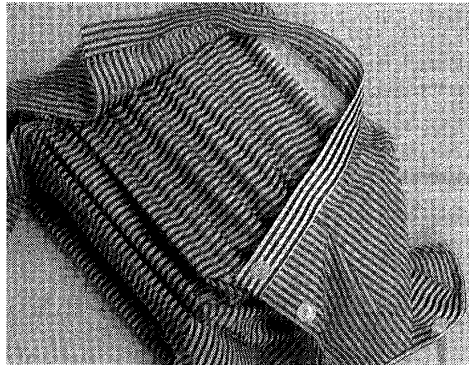


写真7 試作バスルBの収納

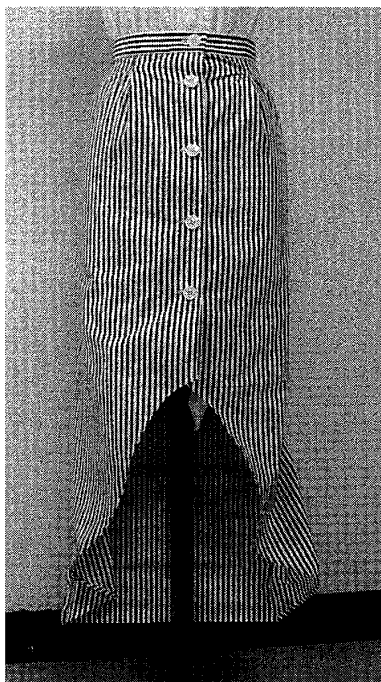


写真8 試作バスルB Front

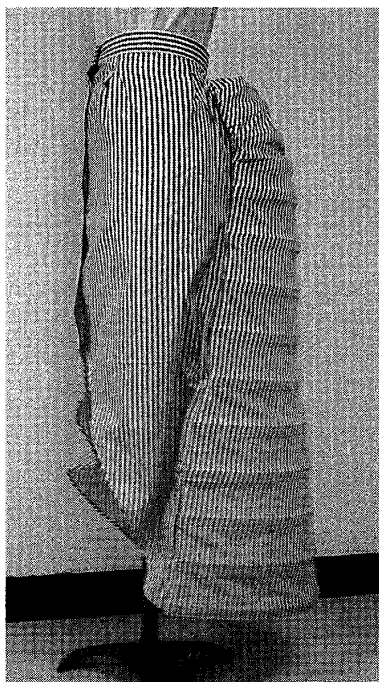


写真9 試作バスルB Side

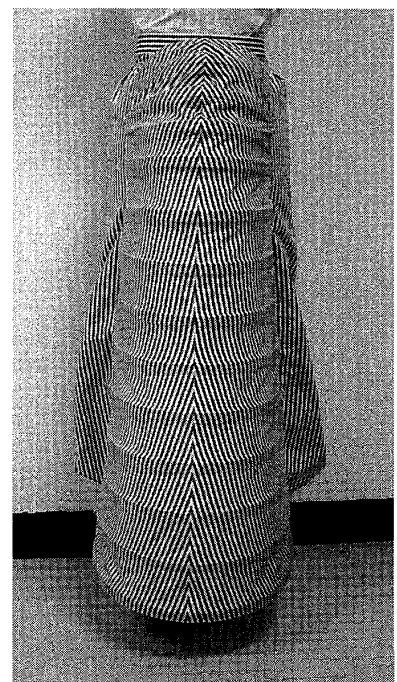


写真10 試作バスルB Back

あったが、今回バスル・スタイルの下着を製作することで得たことは大きかった。それは、切り開き位置でボーンを入れ分量は開きすぎないことである。開き分量により、内側へ丸みすぎ支える布や紐を付けると、カタツムリ状態となる。また2つ目として丈の長いスカートは裾広がりになりすぎるため、切り開きはヒップ位置付近に止めることである。更にボーンの長さは湾曲になることを配慮に入れ、1 cmほど長めに切ることが必要である。

素材は文献資料によると木綿と記されているが厚みは解らないため、一般的な厚みの素材を使用した。しかしボーンを支えることから厚手の物が良く、一般的な厚みではボーンの圧力に耐えられず縫い目が避ける現象を生じるなど実際に縫製し、いくつかの試作を通して得たことは大きく今後の授業等に役立てることができる。

IV ま と め

歴史の中でも代表的な下着としてのクリノリンやバスルであるが、今回、バスル・スタイルの下着（腰当て）を丈の短いものと長いものの二種類を作成し得たことは大きく、実際縫製することで、素材とボーンの関係から、布の厚みがある程度必要であること。ボーンは厚みがあると丈夫で重いドレスを支えられると思ったが、切り口は鋭く、切り離すことが容易ではないこと。ボーンの湾曲を支えるための工夫、布を貼ったり、内側にボーンを入れたり、紐を通し丸みを調整できること。など縫製しないと解らない部分が多いシルエットであった。今後は実際ドレスをあしらうことで、どのくらい支えられるのか、またドレスの重みでどのくらいバスルが沈み込むのかなど更にシルエットを整えための研究をしていきたいと思う。また、バスル・スタイルの上衣に使用されている、コルセットは、ウエストを細く見せるためと、胸を高く美しく見せるものであるが、これらを満足させる技法、仕組みについても研究していきたいと考えている。

参考文献

- 1) 青木英夫：下着の文化史，雄山閣出版，2001. 1 P102～P104
- 2) 大沼淳，古田隆吉他：西洋服装史，文化ファッション大系服飾関連専門講座⑥，文化出版局，2000. 5 P110～P112
- 3) C. Willett, Phillis Cunnington : THE HISTORY OF UNDERCLOTHES, London, 1951, P176～P179
- 4) EDITED BY JOANNE OLIAN : Full-Color Victorian Fashions 1870-1893, 1999 PLATE 11, 13
- 5) 中野秀美：19世紀～20世紀初めの下着の仕組み，文化女子大学ファッション情報科研究所，ファッション研究誌SOEN-EYE No.28, 1997 P62
- 6) 河本信治，深井晃子，周防珠実他：身体の夢 ファッションOR 見えないコルセット，京都服飾文化研究財団，2004. 4 P28